

都・建設予定地 生活記 (16)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

グジャラートにもう二年半ほどいることになるのだが、いまだにグジャラート語を覚えていない。覚える気満々でこちらに来たのだが、「ここ、ヒンディー語通じよね」と思ったから、すっかりやる気が失せてしまって、文字だけ覚えて二年半もほったらかしにしている。だから僕がわかる数少ないグジャラート語は、アーメダバード駐在のほかの方々とほとんど変わらない。今では「ケームチョー」と「マジャーマ」のふたつを毎朝使うだけだ。

まだこちらに来たばかりで語学学習への意欲に溢れていた頃、最初に覚えたのが「ケームチョー（調子どう）？」と「マジャーマ（元気）」のふたつだった。もちろん、それだけでは会話にならない。だからもっと表現を増やそうとある日思い立って、僕が捕まえた先生は、寮の警備員だった。「ほかにいくらでも良い人がいるだろう」と思われるかもしれないけれど、「今日から勉強しよう」と思い立ったのは夜だったし、その時は近くに警備員くらいしかいなかったのだ。

うちの寮の玄関口には、いつも三人くらい警備員が椅子に座って談笑している。その中で、僕がいつも習っていたのは、一番年上で、口元に髭を蓄えた、恰幅のいいおっさんだった。このおっさんの教え方が特別上手いわけではない。むしろちょっと聞き取りづらいのだけど、僕が最初にヒンディー語で聞いた質問の意図を理解してくれのが、唯一、このおっさんだったのだ。

『これは何ですか？』ってグジャラート語でなんていうの？それが僕の質問だった。「アー・スー・チェ？」とおっさんは言った。僕はそれを繰り返した。それが「これは何ですか？」という表現のようだった。中国語みたいだと、中国語なんて勉強したこともないくせに思いながら、僕はそれを手帳に書き留めた。

それから、時々、思いついた時にだけ、おっさんからグジャラート語を習った。「グジャラート語でなんていうの？」は「グジャラーティー・マー・スー・カヘー・チェ？」、わからないは「マナー・カバル・ナティー」、「～が欲しい」は「～ジョイエ・チェ」。

しばらく経った頃、当時アーメダバードに住んでいた上田さんという方からグジャラート語を教えてもらえることになった。そこで文字を覚えて、はじめて文法の説明を受けた。そうすると、自然とおっさんのところから足が遠のいた。上田さんが帰国してしまう頃には、熱が冷めてきていた。誰かに教えてもらおうと思うこともなく、おっさんのところに

足が向かなくなっていた。

今でも、そのおっさんは寮の椅子にいつも座っていて、ほかの警備員と談笑したり、電話をしたりしている。それでも、僕を見かけると必ず「ゲームチョー!？」と馬鹿でかい声で聞いてくる。「マジャーマー」と控えめな音量で返事をする。

毎朝の「ゲームチョー」と「マジャーマー」を繰り返しながら、ちょっとは罪悪感を覚えて、また勉強しようかな、なんて、どうせやりもしないことを思う。それが、グジャラート二年半目の僕の、変わらぬ朝の風景だ。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。